



日本音楽教育学会ニュースレター 第70号

目 次

1 日本音楽教育学会第48回(愛知)大会を終えて

1. 第48回(愛知)大会報告 新山王政和 2
2. 院生フォーラムを終えて 大西 華恵 3
3. ポスター発表に参加して 吉永 早苗 3

2 第8回夏季ワークショップ in 野沢温泉を終えて

1. 地域の方々との連携により実現したワークショップ 桐原 礼 4
2. 高野辰之終焉の地、野沢温泉村を訪れて 佐橋 晋 4

3 学会からのお知らせ

1. 編集委員会からのお知らせ 5

4 音楽教育の窓

1. 〈連載〉音楽・教育・学校(14)
児童の歌声を求めて 岩崎 洋一 6
2. 第11回 APSMER マレーシア初の世界文化遺産、古都マラッカで開催 高須 裕美 7

5 会員の声

1. 男子学生の多い小学校教員養成課程の音楽授業について 井本 美穂 8
2. 会員の新聞・近刊等紹介 9

6 報告

1. 平成29年度総会議事録 10
2. 平成29年度第3回常任理事会 18
3. 平成29年度第2回理事会 19
4. 役員選出のための理事会記録 22

7 事務局より 24

[編集後記]

1 日本音楽教育学会第48回（愛知）大会を終えて



第48回（愛知）大会報告

大会実行委員長 新山王 政和

「1971年第2回愛知大会」、「1980年第11回愛知大会」に続き、第48回大会を愛知教育大学において無事に開催することができました。台風が接近する中、それをものともせず全国各地から雄々しく参加して下さった約500名（含む臨時会員）の「音楽教育に関わる篤き人々」へ心より感謝申し上げます。ありがとうございました。また「選挙と台風」という想定外の中、滞りない大会準備と運営に尽くして下さった実行委員会事務局長の國府先生を初めとした実行委員の先生方へ心より感謝しております。そして私たち実行委員の気持ちを受け止めて強力に支えて下さった小川学会長・今川副会長をはじめとした理事の先生方、権藤事務局長をはじめとした事務局スタッフの方々にも心より御礼申し上げます。

計画時から大切にしたいのが「学会をFestivalにしない」という、永く東海地区を導かれた村尾先生の口癖でした。この言葉を胸に、私自身も2002年第33回愛知大会（金城学院大学）と2007年第38回岐阜大会（岐阜大学）、その他の様々な学会の実行委員を経験してきました。そして今回めざした課題は「会員が主役になれる、会員のための大会」と「自立した学術団体として運営するノーマルな大会」でした。愛知教育大学からは共催後援による施設使用料半額減免をいただきましたが、通常の大会を開催することができたと安堵しております。そして次に大切にしたいのが大会テーマです。「音楽で何を教えるの?」、これまで繰り返されてきた問いですが、逆の視点から「音楽を教える人間には何が必要なのか?」と捉え直すことで何か掴めるのではないかと考え、「音楽を教える人材とは?これからの音楽科教員に求められること」と設定しました。そして新免許法をめぐる課題になっている「教科専門と教科教育を架橋する教育研究領域の確立」に関して「教育改革の中で問われる教師の力量」というご講演をいただいた後、シンポジウムでは「音楽家としての専門性と音楽科教師としての専門性」と「音楽教育と音楽科教育の関係」について、行政・教員養成・教育現場のそれぞれの立場からご発言をいただきました。貴重な示唆が本当にたくさんあり、それに気づかれた方は少なくなかったと思います。来春発行の学会誌「大会報告」をどうぞお楽しみに。

この記事は大会翌日の台風一過、雲が飛んでいく空を眺めながら書いていますが、無事に終わることができたのは学生スタッフの献身的な働きと愛教大関係者のサポートのお陰です。機器トラブルが発生した際に心配して各所へ電話を架けて下さる学長の姿や、駆け付けて下さった理事と職員の方を見た時は、感謝の気持ちで目が潤みました。そして懇親会を盛り上げてくれた職員（郡上踊りは附属学校課職員と附属学校教諭、マジシャンは財務課職員）や、異なる分野でありながら参加された先生方など、愛教大全体で音楽教育学会を盛り上げて下さったことを本当に嬉しく思います。祭りの後のような一抹の寂しさも感じつつ、全ての方々へ心より御礼を申し上げて、第48回愛知大会の報告といたします。

2 院生フォーラムを終えて

大西 華恵 (愛知教育大学大学院)

今大会の院生フォーラムには30名の発表者が集まり、ポスターでの発表を行った。飛び入りでも数名参加し、会場は多岐にわたるテーマのポスターで埋められた。発表者の在席時間には、各自が研究成果を伝えたり、個別討論をしたりする姿が随所でみられた。緊張している様子もありつつ、それぞれが工夫して発表を行っていた。

活発な発表の場になった半面、形としては、発表者が一方的に発表するだけになっていたのが勿体なかった。もちろん発表の場ではあるが、それに加えて、専門家からの意見がもっと貰える場になれば良いと思う。大会は、全国から集まった専門家から話を聞ける機会でもある。そういった方々と院生がもっと交流し、意見交換ができると良い。院生は、様々な意見を吸収すること、見識を広げることが必要である。

そのためには人を集めなければならないが、実際、当日その時での人集めは難しかった。発表者の在席時間外にも意見を集められるよう、コメントカードの設置もしたが、2日間を通してほとんど使われていなかった。今回は悪天候が続き、早めにポスターを撤収した参加者もいたので、仕方ないことではあった。今後、広告方法などを工夫することで、多くの人が集まるようになるとうい。より多くの参加者の目に触れることが、院生フォーラムにとっては必要だと思う。多くの参加者で活性化し、様々な可能性が生まれる場になって欲しい。

3 ポスター発表に参加して

吉永 早苗 (岡山県立大学)

久しぶりに参加した学会は嵐の中。実行委員の皆様は、気が気でない日々をお過ごしだったことと思います。心より感謝申し上げます。

さて、今回からポスター発表形式が導入されたことで、私は迷わずポスター発表を選択しました。なぜなら、「新しい幼稚園教育要領・保育所保育指針が音楽表現教育に求めるもの—コアカリキュラムを踏まえた保育内容“表現(音楽)”を考える—」というテーマについて、コアカリキュラム、モデルカリキュラムとそのシラバスへの展開例を同時に表示し、それらを関連付けながら内容をお伝えしたいと考えていたからです。また本発表は、研究成果発表というよりむしろ情報提供という意味合いが濃い内容でありましたので、各養成校における疑問点・問題点についての情報交換を個別に行いたいとの思いもありました。

当日は、掲示するや否や多くの先生にお訪ねいただきました。「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」の一員として昨年度から取り組んでまいりました研究の一端について、養成校における保育内容「表現」の音楽担当者に求められる授業内容として情報提供させていただけたことを嬉しく思っています。

会場では現実的な会話を重ねる中で、自身の考察の不十分な点を確認することもできました。時間の制約もあり、他の会場に足を運ぶことは難しかったのですが、講義室という程よい広さの会場であるからこそ、和気藹々と親しく交流できたように思います。

2 第8回夏季ワークショップ in 野沢温泉を終えて



1 地域の方々と連携により実現したワークショップ

桐原 礼 (信州大学)

8月28(プレ企画)・29・30日に、「地域連携型・新しいワークショップの試みー音楽の学びの未来をひらくー」というテーマにて、野沢温泉村教育委員会・長野県音楽教育学会・長野認定こども園協会の後援を受け、5つの会場(こども園・小学校・中学校・公民館・おぼろ月夜の館)において、実行委員会と会員持ち寄りによる8つの企画が行われた。参加者総数の111名に加えて、野沢温泉村のこども園園児と保護者の方々、小・中学校の児童生徒が参加した。

地域連携型の試みとして、こども園の園児参加型のオペラ公演《あまんじゃくとうりこひめ》、小学校1年生授業「掛け合い歌であそぼう」、中学生を対象とした「アフリカンリズム」ワークショップが行われた。また公民館において、「五線譜にかわる選択肢ー『フィガー・ノート』を知るー」・「養成校における領域『表現』の授業を考える」・「音声分析勉強会」・「学会誌に投稿しよう！その前に…」と題した、セミナーやラウンドテーブルが行われた。おぼろ月夜の館前の広場で開催された懇親会では、「アイルランド音楽とダンスのゆうべ」が行われ、美味しい食事とともに音楽やダンスを皆で楽しんだ。教育委員会、野沢温泉学園の先生方、おぼろ月夜の館の方々ほか、たくさんのご協力をいただき、地域連携型の新しいワークショップの形を探ることができた。

なお、詳細については、学会のウェブサイト掲載の報告書を参照されたい。



2 高野辰之終焉の地、野沢温泉村を訪れて

佐橋 晋 (日本福祉大学名誉教授)

『故郷』が昭和18年度に掲載中止。戦争期の国民学校令のため「野沢温泉村「おぼろ月夜の館」で初めてこの事実を知る。「赤い夕陽に照らされて友は野末の石の下」厭戦軍歌《戦友》の歌唱禁止は分かりやすいが「兎追いしかの山」が何故？同時期太平洋戦争で「進め一億火の玉だ 鬼畜米英撃滅」と呼号した当局は日本全国民を魅了し続けた高野辰之の《故郷》を戦意高揚とは相容れぬ、許せぬ平和の象徴と捉えたのだ。異国への憎しみを煽り国民を戦場に「故郷」さえ消し去った過去の再来を防ぐため「政界記事・外国電報」に親しんだ高野に学び、我々も今、時局の真実に向き合うことが求められる。

高野の眠る野沢の村で行われた今回のワークショップでは、村教委の絶大なご協力の下、こども園の保育、小・中学校の教育の場も提供され「養成校での『表現』への取組」始め、いずれも喫緊の課題解明が授業の実際を対象に試みられたのは大きな収穫であった。幕開けのオペラ公演「うりこひめ」では「提示は豊かに。同調は求めず」の保育の原点が、[表現]では発表者自身の講義の実状が披露された。[掛け合い歌]では「もう一回練習してみよう」の一言が小学1年生の緊張を解き活気を齎した。「振り返り」では授業者のこの見事な誘導と更に「達成感」を求める姿勢の是非が話題となった。日本語の発現に模倣→創造を唱えた高野もきっと天上から私どものこの催しを見守ってくれていたであろう。ワークショップではそのことがもっと語られてもよかった。そうしなかった権藤敦子実行委員長に代わり『高野辰之と唱歌の時代ー日本の音楽文化と教育の接点をもとめてー』(東京堂出版)をここであらためて紹介することは許されるだろう。

3 学会からのお知らせ

1 編集委員会からのお知らせ

編集委員長 有本 真紀

第3回編集委員会（11月12日開催）では、投稿原稿の採否について審議を行い、以下の通り決定しました。

- ・『音楽教育学』に投稿され、再査読となっていた研究論文1本が採択となった。また、新規投稿4本については、研究論文2本が不採択、研究報告と論考各1本が再査読となった。
- ・『音楽教育実践ジャーナル』への自由投稿1本は、不採択となった。

『音楽教育学』投稿規定、『音楽教育実践ジャーナル』投稿規定、「投稿の手引き」 学会ホームページからご覧いただけます。 分量超過や書式の間違いがなく、投稿前に必ずご確認ください。
--

『音楽教育実践ジャーナル』通巻29号（2018年12月発行）の特集テーマ 特集1「子どもの歌の変貌、その是非」 特集2「日本のピアノ教育を考えるーその歴史と現状」 詳しくは、同封のチラシ、学会ホームページをご覧ください。 テーマにかかわらず、自由投稿も歓迎いたします。
--

次回投稿締切 『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』ともに、2018年2月15日（木）です。 みなさまからの投稿を、心よりお待ちしております。
--

【編集委員会へのQ&A】

Q：2種類の学会誌の中で、「査読あり」と「査読なし」はどのように区分されていますか？

A：『音楽教育学』への投稿のうち、「研究論文」「研究報告」「論考」「研究動向」「書評論文」が「査読あり」です。『音楽教育学』への投稿であっても、それ以外の種類（「書評」「反論」等）は、「査読なし」です。『音楽教育実践ジャーナル』への投稿は、種類にかかわらず「査読なし」です。「査読あり」の原稿は、2名以上の査読者による意見を参考にして、編集委員会がその採否を決定します。

Q：「査読なし」の場合は、投稿すれば掲載されるのでしょうか？

A：「査読なし」であっても、誌面上の制限、内容上の問題とバランスなどを考慮して編集委員会が原稿の採否を決定いたします。その過程で執筆者に内容の修正を求めることもあります。

4 音楽教育の窓

1 〈連載〉音楽・教育・学校 (14)
児童の歌声をもとめて

岩崎 洋一 (元福岡教育大学)

私が児童発声の分野に関心をもったのは、合唱活動の中でも少年少女合唱団の指導に関わったことがきっかけでした。

1980年、当時東京で活発な活動をしていた複数の児童合唱団の練習へ度々足を運ぶなかで感じたのは、各合唱団の声の音色が異なっていることでした。その多くは発声に起因していると考えられます。そこで、学校教育に視点を移して、明治期からの児童の発声指導はどのような変遷を経てきたかを探ってみたくなったのです。

それでは、特徴的な歌唱指導を紹介しましょう。1898(明治31)年、本橋義教『小学唱歌教授法』では、教師の指導は「大聲號唱スルヲ似テ得々タルモノアリ、児童ハ現在暴音ニ唱ヒ居ルモ猶薄弱ナリトシ更ニ激烈ニ唱ハシメント企ツル」という記載が見られます。当時の指導が目には浮かびますね。大正時代に入り、これまでの児童の発声を陶冶する動きが高まりました。1922(大正11)年、草川宣雄が『唱歌法と發聲法』で「頭声発声」を主張、一方、1924(大正13)年福井直秋が『唱歌の歌い方ひ方と教へ方』で「中声発声」を主張し、二大論争となったのです。両者は、それまでの胸声を強く出させず弱く歌わせるとした「弱声発声」では一致していました。けれども、理論的に児童の歌声を捉えた草川よりも、教育現場に根ざし、児童の実際面の運用から捉えた福井の方が受け入れられていったようです。それは、草川が1932(昭和7)年、自ら主張してきた「頭声発声」は、「中声発声」と同じであると自己修正したことにより明白になりました。しかし、現在に通じる考えとしては、草川の頭声発声に近いように思います。

これら両者の影響もあり、弱声に陥った児童の発声は、昭和に入り児童本来の声を見直そうとする気運をみせたのです。それは1932(昭和7)年から始まった「児童唱歌コンクール」に如実に反映されています。第1回は「蚊の鳴くような細い声で、貧弱なものであった」のが、第3回には、「確実に声量の必要が認識され、児童本来の自然の声を駆使できるようになった」のです。これはラジオのもっている伝達力が、全国の教育現場に影響を与えたといえるでしょう。

歴史研究では文献が主になりますが、文献に書かれた内容の裏付けとして音源にあたることも重要だと感じてきました。例をあげると、1936(昭和11)年度の男子全国一位の歌声に、「教育音楽」の記事や、当時の指導者に伺った内容は、「弱声」であったと言われていたことです。しかし、実際にそのコンクールを録音したSPレコードからは、現在のボーイ・ソプラノに劣らない響を伴った豊かな歌声だったのです。そのことから、当時の社会背景や教育界の潮流を咀嚼し、できる限り音楽に寄り添って研究を進めていく大切さを感じた次第です。文章は生きた証人です、その証のために音が必要なのです。

学校教育の発声指導は、1941(昭和16)年『ウタノホン 教師用』に「自然の發聲」が公に位置づけられました。その後の、1947(昭和22)年から現在までの学習指導要領の発声の経緯は述べるまでもないでしょう。前述した、東京の児童合唱団の音色の違いは、その合唱団が活動の中核にすえている作品の音楽様式が発声の方向を決めているとした帰納的な帰結であり、現在の「自然で無理のない声」は多様な音楽ジャンルの表現を含む演繹的に記されていると解釈できるのではないのでしょうか。

発声は追究してもしきれない分野です。私は現在も合唱界に関わっていますが、これまでの研究や多くの人との出会いが、合唱活動に繋がっていることを幸いに思うのです。

【2】 第11回 APSMER マレーシア初の世界文化遺産、古都マラッカで開催

—第11回 The Asia-Pacific Symposium for Music Education Research (APSMER) 2017年7月19日～21日報告—

高須 裕美 (名古屋短期大学)

クアラルンプールから車で2時間半、やっとオランダ建築の風情漂う赤色のキリスト教会を通過したと思えば、イスラム寺院からうねるような祈りの呼び出しの音が聞こえました。まさにヨーロッパとアジアの文化が融合するマレーシアの歴史的な街“マラッカ”にて、今回の APSMER は開催されました。大会スタッフの笑顔や親切な対応から、穏やかなマレーシアの風土に接しました。

ISME President でもある Lee Higgins 氏は基調講演で、社会的弱者を含むあらゆるコミュニティで活躍する音楽教育者を提示しながら、その必要性について問題提起されました。また、民族や国家を超えた音楽の仕掛人として成功するマレーシアの音楽プロデューサー Omar 氏によるヒット戦略についての刺激的なプレゼンテーション、Sibelius Academy の H.Partti 氏は、“Intercultural competencies” と “Creativity” についてフィンランドでの実践、大学ラボでのセッションも紹介されました。3つの基調講演はいずれも “Music Education Transcending Borders” という大会テーマにつながるものでした。

大会プログラムには、口頭発表 113、ポスター発表 22、ワークショップ 15、シンポジウム 1 が掲載され、全体参加者は約 200 名、日本の参加者は 42 名でした。その中には第 14 回音楽教育ゼミナール（目白ゼミナール）を受講された研究者が 11 名含まれていました。また、日本の提案より新設された発表者による 5 分間プレゼンテーション “Spoken Poster” は、簡潔で良い！と好評でした。

そして今回、日本人の研究発表数が顕著でした。私自身も 2 本の発表で参加しました。分かりやすい発表への道のりはまだまだ長いのですが、異文化の視座から意見や感想を頂けることは、新たな研究課題を問い直す機会にもなります。経験豊富な日本人や、その他アジアの研究者にはジョークを交え、フロアの反応を楽しみながらコミュニケーションされる方もおられ、大変刺激になりました。ワークショップも ISME に負けず盛況で、参加者が多いに楽しめるプログラムでした。



【写真1】 マラッカ高校 (男子校) ガムラン授業の様子

国際学会は、研究交流だけでなく国を超えた人脈を広げる場ではあるのですが、やはり日本人研究者の方々とお話しできる時間があるとホッとします。二日目の夜、この学会の発起人・村尾忠廣先生、そして

坪能由紀子先生がお声掛け下さり、円卓 5 つほどの日本人参加者が集まり交流を深めました。ゆったりしたひと時から、音楽を愛する者同士であることを教えて頂いたような夜でした。先輩研究者らの懐の深さに感謝申し上げたいと思います。



【写真2】 Welcome Dinner でのマレーシアの舞踊

5 会員の声

1 男子学生の多い小学校教員養成課程の音楽授業について

井本 美穂（岡山理科大学）

昨年の春、岡山理科大学に新設された教育学部初等教育学科に赴任し、音楽全般の授業を担当しています。本学の初等教育学科には、小学校教員免許を取得することをめざして、現在2年生が79名（男子63名、女子16名）、1年生が75名（男子57名、女子17名）在籍しています。

本学では「探究する力」をテーマとし、体験を通じて気づき、考え、理解する楽しさを子どもたちに伝える力を養うことを重視しています。各教科の授業では、こうした力を培うことを目標として、授業内容を工夫しています。

音楽分野については、専任の教員は私一人で、手探りで日々を過ごしています。本学科は男子学生が8割を占めており、全体的に明るく素直で、大変積極的に講義に取り組んでいます。ただ、音楽に苦手意識を持っている学生が多く、学生の9割はピアノを弾くのが初めてという状況であるため、いかにしてモチベーションを上げるかが大きな課題です。そこで現時点では、まずは学生自身が音楽を楽しむようにすることを優先し、授業内容を構成しています。具体的な例としては、基本的な鍵盤楽器奏法と歌唱法を学習する「ピアノ奏法」のなかに連弾や合奏を取り入れ、期末には学生が発表会を企画・実施しました。学生はこれらの活動をとおして、仲間と共に音楽を作り上げる醍醐味を味わっていました。「初等音楽科内容論」では、音遊びや音楽づくりをとおして、ピアノが得意でなくても表現を工夫して音と親しめることを体感しました。

また、授業とは別に、モチベーションアップの試みとして、大学内のオープンスペースで有志によるミニコンサートを企画し、ランチタイムに演奏する機会をつくっています。このコンサートには、学生だけでなく、教員・職員の方々にも参加していただき、最後の曲は出演者全員で合唱・合奏を行います。様々な立場や年齢の人が一緒に演奏を楽しむ様子を観客席で見て、「次はやってみたい」と参加を希望する学生が増えてきています。また、オープンキャンパスでは「音とことばのコラボレーション」として、国語の先生と協力し、本の読み聞かせの効果音づくりに挑戦しました。

こうした積み重ねにより、音楽への抵抗が少しずつほぐれてきて楽しんで音楽パフォーマンスを行うようになってきていると感じています。今後はさらに、知識や技能的な面を伸ばしていく必要があります。小学校全科目を学修しなければならない学生が、初等教育学科の限られた授業時間数のなかで、新学習指導要領で求められている音楽授業を実践できるようになるためにはどういった方法をとればよいかという点を考え、楽しみながらも知識や技能をしっかりと高めていける授業を工夫していくことが、これからの課題です。



ミニコンサートで連弾を披露



大学のホールで発表会を開催

2 会員の新刊・近刊等紹介

★高橋憲人, 他著:『Drawing Tube vol.01 Archive』Drawing Tube, 2017/7/14 タブロイド版
80頁, ISBN: 978-4-9909559-0-8, 2,500円+税

描くこと, 書くこと, 声を発すること, 音を出すことと, それらの間について。ドローイングの領域を拡張し続けるアーティスト, 鈴木ヒラクと, 詩人, 吉増剛造のセッションの記録。書家 華雪によるテキスト, サウンドスケープ研究者の高橋憲人と鈴木ヒラクの電話対談をバイリンガルで収録。

★村尾忠廣編著『ピアノも歌う』ファウエムミュージックコーポレーション 2017/9/22 菊倍版 98頁
ISBN978-4-9905887-4-8C3073 1,800円 [税込]

大部分は村尾忠廣によるオリジナル作品と編曲。編著のコンセプトは<ピアノも歌う>。特徴は音楽教育学の研究を研究成果の応用へと工夫していること, 現代ピアノ奏法の科学的研究を反映していること等々。作成意図を見事にとらえた奥忍による表紙デザインには, 歌うピアノがときめいている。

★赤羽美希著・深見友紀子監修『楽しい楽器あそびと合奏の本【伴奏 CD 付き】』

ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス 2017/10/10, AB版 168頁

ISBN978-4-636-93549-3 2,700円+税

楽器導入から合奏指導へと系統的に構成。即興や簡単なパターンの繰り返しで, すぐにできる合奏を提案している。幼稚園・保育園のみならず, 養成大学での演習や小学校の授業でも使えるアイデア満載の一冊。

★たたら康恵監修 “CD MODERN AFRICAN HEALING” (6曲入) BOKU-001 2,000円 [税込]

購入先: musicatutti1259@live.jp, 作曲・演奏: B Bモフラン (劇団四季「ライオンキング」初代作曲者)

8月の野沢温泉でのワークショップ「アフリカンリズム」のエッセンス満載。数々のアフリカンドラム, ピアノ, ヴォーカル, カリンバなど, 日欧アフリカの新しい響きはリズムの学習にも最適です。

<http://switch-music.studio-switch.jp/> で試聴してください。

投稿先アドレス ✉ onkyoiku.kouhou アット gmail.com

★ ★ ★ ★ ★ 学会誌セット販売のお知らせ ★ ★ ★ ★ ★

『音楽教育学』セット販売 限定特別価格

- ① 創刊号～46-2巻までの限定5セット 全93冊 50,000円 (送料無料)
- ② 30巻～46-2巻までのセット 全39冊 25,000円 (送料無料)

『音楽教育実践ジャーナル』セット販売

創刊号～vol.14 全27冊 15,000円 (送料無料)

お申し込み方法など詳細は同封のチラシおよび学会HPをご覧ください。

6 報 告



平成 29 年度総会議事録

日時：平成 29 年 10 月 21 日（土）17：00～18：30

場所：愛知教育大学 講堂

開会に先立ち出席者数を調査し、会則第 13 条に基づき、会員総数の 5 分の 1 の定足数を満たしていることを確認した（会員総数 1,577 名、定足数 316 名、委任状 368 通、出席者 102 名、委任状と出席者の合計 470 名）。小川会長の挨拶に続いて北山敦康会員を議長に選出し、報告事項、審議事項の順に協議が行われた。

【報告事項】

(1) 会務報告（権藤事務局長）

総会資料に基づいて、2016 年 10 月 9 日より 2017 年 10 月 21 日までの会務報告が行われた。

(2) 選挙報告（高橋選挙管理委員長）

第 23 期会長・理事選挙が滞りなく実施されたことが報告された。

(3) 各委員会等から

・編集委員会（有本委員長）

『音楽教育学』の投稿規定の一部改正（「研究動向」も査読ありとする）について報告・了承された。あわせて、『音楽教育学』の投稿締切を 11 月 30 日に延長することが報告され、『音楽教育実践ジャーナル』とともに投稿への呼びかけが行われた。

『音楽教育学』投稿規定（平成 29 年 10 月 20 日理事会承認）

【改正案】	【現行】
II 投稿の種類と一般的な注意	II 投稿の種類と一般的な注意
3. 「研究論文」「研究報告」「論考」「研究動向」「書評論文」の掲載は、会員 1 人につき 1 年度に 1 件を限度とする。共同執筆の場合もこれに準ずる。	3. 「研究論文」「研究報告」「論考」「書評論文」の掲載は、会員 1 人につき 1 年度に 1 件を限度とする。共同執筆の場合もこれに準ずる。
V 原稿の採否等	V 原稿の採否等
1. 「研究論文」「研究報告」「論考」「研究動向」「書評論文」の選定に際しては、2 名以上の査読者による意見を参考にして、編集委員会がその採否を決定する。査読者は、編集委員会が委嘱する。なお、編集委員会は、必要に応じて執筆者に内容の修正を求めることがある。	1. 「研究論文」「研究報告」「論考」「書評論文」の選定に際しては、2 名以上の査読者による意見を参考にして、編集委員会がその採否を決定する。査読者は、編集委員会が委嘱する。なお、編集委員会は、必要に応じて執筆者に内容の修正を求めることがある。
附 則 この規定は、平成 29 年 10 月 21 日より施行する。	附 則 この規定は、平成 28 年 10 月 9 日より施行する。

・選挙管理委員会（高橋委員長）

選挙結果についてはニュースレター第 69 号に掲載済みであることと、次回に向けて投票率の向上について呼びかけが行われた。

- ・ 国際交流委員会（阪井委員長）
ニュースレター第 66 号での現状と課題の報告、各会員の活動状況を交流し、様々な提案、情報を蓄積していけるよう呼びかけが行われた。あわせて、2018 年 7 月 15 日～20 日 ISME アジャルバイゼン・バクー(学会ウェブサイト>トピックス 9/11 参照), 2019 年 7 月 APSMER マカオ, 2020 年 7 月 ISME フィンランド・ヘルシンキの開催について情報提供がされた。
- ・ 広報委員会（奥委員長）
ジェンダー、地域、年齢のバランスを考えた編集を心掛けていることが説明され、あわせて、DVD、書籍等の新刊情報の記事提供について呼びかけが行われた。
- ・ 音楽文献目録委員会（木間委員）
『音楽文献目録』第 44 巻（2016. 10）の発行状況、国際音楽学会（IMS）東京大会、委員会の財政状況、今後の課題（Web 版への移行、海外での情報収集等）について報告がされた。

(4) 「大会の発表等に関する内規」改正について（加藤総務担当理事）

ポスター発表の実施にともなう内規の改正について、報告・了承された。

「大会の発表等に関する内規」改正について

改正後	改正前
1. 大会において口頭発表、ポスター発表、共同企画を希望する正会員・特別会員は、 <u>筆頭（代表者）・連名にかかわらず</u> 5月末日以前に当該年度までの会費を納入し、所定の期日までに発表申込を完了しておかなくてはならない。	1. 大会において口頭発表、共同企画を希望する正会員・特別会員は、5月末日以前に当該年度までの会費を納入し、所定の期日までに発表申込を完了しておかなくてはならない。
2. 同一大会において口頭発表、ポスター発表の筆頭発表者（代表者）となれるのはいずれか1件のみとする。 <u>共同企画で筆頭発表者となれるのも1件のみとする。</u> なお、 <u>筆頭（代表者）・連名にかかわらず</u> 、1人が発表できる件数は口頭発表とポスター発表、および共同企画をあわせて2件を上限とする。	2. 同一大会において口頭発表、 <u>共同企画それぞれ</u> 筆頭発表者（代表者）となれるのは1件のみとする。また、 <u>筆頭（代表者）・連名にかかわらず</u> 、1人が発表できる件数は口頭発表と共同企画をあわせて2件を上限とする。なお、 <u>口頭発表の場合</u> 、1名を上限として非会員が連名発表者になることができる。ただし、 <u>非会員の連名発表者は当日臨時会員となつて発表会場に同席することが望ましい。</u>
3. <u>口頭発表、ポスター発表の場合</u> 、1名を上限として非会員が連名発表者になることができる。ただし、 <u>非会員の連名発表者は当日臨時会員となつて発表会場に同席することが望ましい。</u>	[新設]
4. 共同企画における発表者は、代表者を含む2名以上が正会員・特別会員・名誉会員であることとする。このほかに、複数の非会員が連名発表者となることができる。	3. 共同企画における発表者は、代表者を含む2名以上が、 <u>5月末日以前に当該年度までの会費を納入した正会員・名誉会員であることとする。</u> このほかに、複数の非会員が連名発表者となることができる。
5. プロジェクト研究における発表者は、常任理事会が決定する。なお、発表者の会員資格は問わないものとし、非会員の場合は大会参加費納入の義務を負わない。	4. プロジェクト研究における発表者は、常任理事会が決定する。なお、発表者の会員資格は問わないものとし、非会員の場合は大会参加費納入の義務を負わない。

<p>6. 大会実行委員会企画における発表者（講演者，パネリスト，ワークショップ指導者等を含む）は，大会実行委員会が提案し，常任理事会の承認を得る。なお，発表者の会員資格は問わないものとし，非会員の場合は大会参加費納入の義務を負わない。</p>	<p>5. 大会実行委員会企画における発表者（講演者，パネリスト，ワークショップ指導者等を含む）は，大会実行委員会が提案し，常任理事会の承認を得る。なお，発表者の会員資格は問わないものとし，非会員の場合は大会参加費納入の義務を負わない。</p>
<p>7. 院生フォーラムの発表者は，正会員・特別会員の大学院生に限る。発表に先立ち，大会開催当日までに当該年度までの会費を納入し，大会参加費を納入すること。</p>	<p>6. 院生フォーラム（ポスター発表） 院生フォーラム（ポスター発表）の発表者は，正会員に限る。発表に先立ち，大会開催当日までに当該年度までの会費を納入し，大会参加費を納入すること。</p>
<p>8. 大会参加費は，名誉会員，賛助会員，<u>5</u>および<u>6</u>に該当する非会員を除き，すべての大会参加者が納入する。院生フォーラムの参観のみの場合も同様である。なお，金額は，会員／非会員，前納／当日納入の別により，別途定める。</p>	<p>7. 大会参加費は，名誉会員，賛助会員，<u>4</u>および<u>5</u>に該当する非会員を除き，すべての大会参加者が納入する。院生フォーラムの参観のみの場合も同様である。なお，金額は，会員／非会員，前納／当日納入の別により，別途定める。</p>
<p>附則 この内規は，平成29年5月14日から実施する。</p>	<p>附則 この内規は，平成28年10月8日から実施する。</p>

(5) 第8回夏季ワークショップ in 野沢温泉 報告（権藤実行委員長）

地域連携型の新しいワークショップの試みとして，こども園，小学校，中学校，公民館にて地域のご協力のもと実施させていただいた。会員54名，臨時会員57名，合計111名に加えて，保護者等地域の方々の参加を得て盛況のうちに終了した。

(6) 設立50周年企画について（加藤記念出版準備委員長）

『最新音楽教育研究ハンドブック』の発行について，8月23日に音楽之友社に企画書を持参，10月17日にこの出版企画についての承認を得られたとの報告があった。

(7) 「教育勅語の教材使用問題」について（小川会長）

6月16日付で「政府の教育勅語使用容認答弁に関する声明」を教育学関連諸学会加盟学会17団体の会長連名で提出したことが報告された（後日9団体追加，1団体は別途提出）。

【審議事項】

(1) 平成28年度会計報告・監査報告（島崎会計担当理事・佐野会計監事）

資料をもとに会計報告と監査報告が行われ，原案どおり承認された。

II 研究出版基金 現在高 ¥3,713,960 (①-②)

収入	平成27年度までの積立金	¥3,744,067	
	平成28年度積立金	¥100,000	
	利息	¥33	
<hr/>			
支出	倫理ガイドブック増刷費	¥129,924	¥3,844,100 ①
	振込手数料	¥216	
<hr/>			
			¥130,140 ②

III 学会基金 現在高 ¥2,015,543 (①-②)

収入	平成27年度までの積立金	¥1,980,575	
	平成28年度積立金	¥700,000	
	利息	¥21	
<hr/>			
支出	学会賞		¥2,680,596 ①
	J-STAGEバックナンバー搭載費	¥664,189	
	振込手数料	¥432	
	残高証明手数料	¥432	
<hr/>			
			¥665,053 ②

IV ゼミナル・ワークショップ基金 現在高 ¥1,348,411 (①-②)

収入	平成27年度までの積立金	¥1,421,856	
	平成28年度積立金	¥100,000	
	利息	¥12	
	ゼミナル返金	¥126,975	
<hr/>			
支出	目白ゼミナル	¥300,432	¥1,648,843 ①
<hr/>			
			¥300,432 ②

V 国際交流基金 現在高 ¥280,352 (①-②)

収入	平成27年度積立金	¥304,646	
	平成28年度積立金	¥100,000	
	利息	¥2	
<hr/>			
支出	韓国音楽教育学会関係	¥124,296	¥404,648 ①
<hr/>			
			¥124,296 ②

VI 選挙積立金 現在高 ¥301,954 (①-②)

収入	平成27年度までの積立金	¥1,953	
	平成28年度積立金	¥300,000	
	利息	¥1	
<hr/>			
支出		¥0	¥301,954 ①
<hr/>			
			¥0 ②

◎ 平成28年度決算を上記の通り報告いたします。

平成29年4月16日 会計担当 島崎 篤子 ㊞

寺田 貴雄 ㊞

◎ 上記の通り相違ないことを監査いたしました。

平成29年4月16日 会計監事 佐野 靖 ㊞

嶋田 由美 ㊞

(2) 平成 29 年度事業計画および補正予算（権藤事務局長・島崎会計担当理事）

資料をもとに説明が行われ、原案どおり承認された。

平成 29 年度事業計画

平成 29 年		8 月 31 日	『音楽教育学』第 47 巻第 1 号 発行
4 月 16 日	平成 28 年度会計監査会	10 月 20 日	第 48 回大会プログラム発送
5 月 14 日	平成 29 年度第 1 回常任理事・理事会	10 月 21-22 日	平成 29 年度第 3 回常任理事・理事会
5 月 14 日	平成 29 年度第 1 回編集委員会	10 月 22 日	第 48 回大会・総会 会場：愛知教育大学
5 月 14 日	第 1 回設立 50 周年記念出版準備委員会	11 月 12 日	第 3 回設立 50 周年記念出版準備委員会
6 月 14 日	第 48 回大会研究発表・共同企画申込締切	12 月下旬	『音楽教育実践ジャーナル』vol.15 発行
6 月 18 日	第 23 期会長・理事選挙公示		ニュースレター 第 70 号 発行
6 月 18 日	ニュースレター 第 68 号 発行	平成 30 年	
6 月 29 日	第 48 回大会研究発表受理通知	2 月中旬	平成 29 年度第 4 回編集委員会
7 月 9 日	第 23 期会長・理事選挙開票	2 月中旬	平成 29 年度第 4 回常任理事会
7 月 17 日	平成 29 年度第 2 回常任理事会	3 月下旬	ニュースレター 第 71 号 発行
7 月 17 日	第 2 回設立 50 周年記念出版準備委員会		『音楽教育学』第 47 巻第 2 号 発行
8 月 9 日	平成 29 年度第 2 回編集委員会	3 月末日	平成 29 年度会計決算
8 月 23 日	ニュースレター 第 69 号 発行		
8 月 28-30 日	第 8 回夏季ワークショップ in 野沢温泉		

*平成 29 年度補正予算案は p.16 に掲載しています。

(3) 平成 30 年度事業計画（権藤事務局長）

資料をもとに説明が行われ、原案どおり承認された。

平成 30 年度事業計画

平成 30 年		10 月 5 日	第 49 回大会プログラム発送
4 月上旬	平成 29 年度会計監査会	10 月 5 日	平成 30 年度第 3 回常任理事会・第 2 回理事会
4 月	平成 30 年度第 1 回編集委員会	10 月 6, 7 日	平成 30 年度第 4 回編集委員会
5 月中旬	平成 30 年度第 1 回常任理事・理事会	12 月下旬	第 49 回大会・総会 会場：岡山大学
5 月	平成 30 年度第 2 回編集委員会		『音楽教育実践ジャーナル』vol.16 発行
5 月 31 日	第 49 回大会口頭発表・共同企画申込み締切		ニュースレター 第 74 号 発行
6 月下旬	ニュースレター 第 72 号 発行	平成 31 年	
6 月下旬	第 49 回大会研究発表受理通知	2 月中旬	平成 30 年度第 5 回編集委員会
7 月下旬	平成 30 年度第 2 回常任理事会		平成 30 年度第 4 回常任理事会
8 月上旬	平成 30 年度第 3 回編集委員会	3 月下旬	『音楽教育学』第 48 巻第 2 号発行
8 月	第 15 回音楽教育ゼミナール		ニュースレター 第 75 号 発行
8 月下旬	『音楽教育学』第 48 巻第 1 号 発行	3 月末日	平成 30 年度会計決算
	ニュースレター 第 73 号 発行		

(4) 平成 30 年度予算（島崎会計担当理事）

資料をもとに説明が行われ、原案どおり承認された。（p.17 に掲載）

(5) 第 49 回大会について（小川会長）

平成 30 年度第 49 回大会を岡山大学において 2018（平成 30）年 10 月 6 日（土）、7 日（日）に開催することが承認された。

(6) 第 50 回大会候補地について（小川会長）

第 50 回大会を関東地区にて開催することが承認された（候補地 東京藝術大学）。

平成30年度予算

平成30年度その後の決算

I 一般会計

収入		支出	
科 目		科 目	
前年度繰越残高	2,741,000	大会運営費	2,100,000
正会員会費	10,544,000	大会運営費	700,000
1,000名正会員会費1,000,000		事務運営費	2,000,000
学生会員会費	3,000	プロモーション費	200,000
団体会員会費	40,000	学生会費	2,000,000
賛助会員会費	200,000	会費徴収手数料	2,000,000
学生会費上金	200,000	会費徴収手数料	200,000
本費		ニューズレター	200,000
委託費		伊勢運賃費	600,000
大会参加費	1,400,000	講習-講習費	1,200,000
その他	20,000	会費	20,000
大会運営費補助金		旅費-交通費	1,700,000
大会運営費補助金		印刷費	20,000
		事務経費	4,041,000
		本費	200,000
		人件費	2,000,000
		委託費	2,000,000
		委託費	40,000
		分攤金	200,000
		返戻金	200,000
		セミナー開催費	100,000
		国際交流基金	100,000
		研究出版基金	100,000
		学生会費	100,000
		予備費	2,100,000
計	16,575,000	計	16,575,000

II 研究活動基金

43,513,000 ①-③

収入		
平成29年度までの積立金	43,513,000	
平成30年度積立金	400,000	43,913,000 ①
支出		
研究活動基金	400,000	400,000 ②

III 学生会

41,500,000 ①-③

収入		
平成29年度までの積立金	41,500,000	
平成30年度積立金	400,000	41,900,000 ①
支出		
学生会費	400,000	400,000 ②

IV ゼミナルワークショップ基金

490,411 ①-③

収入		
平成29年度までの積立金	490,411	
平成30年度積立金	400,000	890,411 ①
支出		
ゼミナル(3回)開催金	400,000	400,000 ②

V 国際交流基金

430,000 ①-③

収入		
平成29年度までの積立金	430,000	
平成30年度積立金	400,000	830,000 ①
支出		
国際交流基金	400,000	400,000 ②

VI 奨励金

436,104

収入		
平成29年度までの積立金	436,104	
平成30年度積立金	400,000	836,104

次期役員

- 会 長：今川 恭子
 副 会 長：有本 真紀
 事務局長：今田 匡彦
 常任理事：小川 容子, 菅 道子, 北山 敦康, 佐野 靖, 島崎 篤子, 坪能由紀子, 寺田 貴雄,
 藤井 浩基, 本多佐保美
 理 事：奥 忍, 阪井 恵, 志民 一成, 玉村 恭, 中嶋 俊夫, 日吉 武, 水戸 博道,
 村尾 忠廣, 山崎 浩隆
 会計監事：杉江 淑子, 木村 充子両会員が推薦され、承認された。

全ての協議を終了の後、議長を解任し、総会を閉会した。

② 平成 29 年度第 3 回常任理事会

日 時：平成 29 年 10 月 20 日（金）14:00～15:00

場 所：愛知教育大学 第一共通棟 211 教室

出席者：小川，今川，権藤，今田，奥，加藤，島崎（記録），菅，杉江，坪能

最初に小川会長から開会の挨拶があり，理事会と重複するものは割愛して審議・報告された。

【審議事項】

1. 第 49 回大会常任理事会企画について（坪能）

従来，プロジェクト研究Ⅰは第 1 年次研究，プロジェクト研究Ⅱは第 2 年次研究としてきたが，初日に行うものをプロジェクト研究Ⅰ，2 日目に行うものをプロジェクト研究Ⅱとして，研究年次については，タイトルに（1 年次）（2 年次）と明記する方がわかりやすいのではないかという提案が企画担当理事から出され，承認された。因みに本大会のプログラムはこの提案に沿った表記になっている。また，会計上の確認として，プロジェクト研究の内容が次年度の内容にまで発展した場合でも，年度内研究の経費については当該年度予算で処理できること，特別な調査等で予算を超える費用がかかる場合は，あらかじめ常任理事会で検討すること等が確認された。

2. 第 15 回音楽教育ゼミナールについて（坪能）

p.20「7. 第 15 回音楽教育ゼミナールについて」をご参照下さい。

3. 新入会員および退会者について（権藤）

p.20「9. 新入会員および退会者について」をご参照下さい。

4. 事務局より（権藤）

事務局長から，選挙人名簿作成等にかかわる事務局業務が煩雑になっているため，会員の地区変更等の確認を間違いなく確実に出来るよう，会員本人が変更届・退会届を学会の HP で行えるようなシステムづくりを検討したいとの提案があり，「変更届」「退会届」の書式案を検討した。これに関連して，会費納入済みの退会者に関しては，これまで退会を申し出た後であっても年度末までは学会からの送付物を送付してきたが，「退会届」で退会者本人が年度末まで送付物を希望するか否かの選択ができるようにしてはどうかとの意見が出された。あわせて，今後，会員情報確認の方法については，名簿作成作業等とも重ねて検討することとなった。

5. その他

本年度からポスター発表が始まり，学会誌での大会報告の件数も増加している。頁数の関係から，次年度以降の院生フォーラムの報告掲載方法，あわせて発表のあり方等についても検討してはどうかという意見が出され，次回の常任理事会で継続審議することになった。

※ 第 4 回常任理事会 2018 年 2 月 17 日（土）14:00～ 於：キャンパスイノベーションセンター

3 平成 29 年度第 2 回理事会

日 時：平成 29 年 10 月 20 日（金）15:00～16:00

場 所：愛知教育大学 第一共通棟 211 教室

出 席：小川，今川，榎藤，今田，奥，加藤，島崎，菅（裕），杉江，坪能，有本（記録），木村（充），新山王，南

最初に小川会長から開会の挨拶があり，大会実行委員会の新山王，南両理事に謝意が伝えられた。

【会務報告】（2017 年 7 月 18 日以降）

8 月 9 日	第 2 回編集委員会（立教大学）
8 月 24 日	ニュースレター第 69 号発行
8 月 28-30 日	第 8 回夏季ワークショップ in 野沢温泉
8 月 31 日	『音楽教育学』第 47 巻第 1 号・第 48 回大会プログラム 発行・発送
10 月 20 日	平成 29 年度第 3 回常任理事会・第 2 回理事会（愛知教育大学）

【審議事項】

1. 総会議題の確認（榎藤）

総会資料（案）の確認がなされ，差し替え・訂正なしで総会に提出することが確認された。

2. 平成 29 年度補正予算，平成 30 年度予算について（島崎）

平成 29 年度補正予算は，7 月の常任理事会で決定した 50 周年記念出版編集費などの追加分が反映されていること，正会員の増加による増収分は必要な費目に充当されたことなどが確認された。平成 30 年度予算は本年 7 月 12 日現在の会員数を基に作成されており，会員数の変動などに伴って次年度も補正予算が必要になること等が説明され，了承された。なお，未納者への振込用紙による早めの納入呼びかけ，会費納入に関する混乱の予防策として本年度分までの入金（誤って次年度以降の入金をしないこと）の呼びかけを総会で行うこととなった。

3. 設立 50 周年記念出版について（加藤）

記念出版準備委員会の加藤委員長から記念誌の企画書についての説明が行われ，音楽之友社の全社会議で出版企画が認められたとの連絡があった。ただし，書籍代の関係から総頁を 250 頁程度に抑えてほしいとの要望があったこと等が報告された。22 日に準備委員会を開催するとともに，よりよい記念誌を作成するために，今後さらに内容及び執筆者等の具体的な検討が行われる。

4. 『音楽教育学』投稿規定の改正について（有本）

「研究動向」を「査読あり」とすることが承認され，本案件を総会にかけることが了承された。

5. 第 49 回大会について（小川）

小川会長から次年度大会の会場および開催予定日が提案され，承認された。

会場：岡山大学 開催予定日：2018 年 10 月 6 日（土）・7 日（日）

報告された。木村事務局長からは、近々報告書が学会 HP にアップされるとの報告がなされた。

3. 各委員会等報告

1) 編集委員会（有本）

- ・ 8月15日の投稿締め切りには、『音楽教育学』に5本（研究論文2本，研究報告2本，論考1本）の投稿があった。
- ・ 8月末発行の『音楽教育学』第47巻第1号に，5本の論文を掲載した。
- ・ 『音楽教育実践ジャーナル』vol.15は，すべての原稿が入稿され，初校待ちとなっている。
- ・ 愛知大会発表者などの積極的な投稿を促すため，『音楽教育学』の次回投稿締め切りを11月30日（木）まで延長した。
- ・ 『音楽教育実践ジャーナル』vol.16（締切2018年2月15日）の特集テーマは，特集1「子ども
の歌の変貌，その是非」，特集2「日本のピアノ教育を考えるーその歴史と現状」である。

2) 国際交流委員会（阪井→権藤）

- ・ 不具合により連絡が滞っていたが，団体会員の登録が確認され正常な連絡が回復した。
- ・ ISMEからの情報は学会HP等でも適宜取り上げ，会員への周知を図るようにしている。
- ・ 韓国音楽教育学会との交流に今田理事に翻訳の助力を得た。最終的に大会発表応募はなかった。

3) 広報委員会（奥）

- ・ 10月21日の総会前に会議をして合議を得た上で，総会で報告する。
- ・ ニュースレターの「会員の声」は中国四国地区に，「大会報告」は実行委員長に依頼する。

4) 音楽文献目録委員会（木間→権藤）

- ・ 2回の委員会が開催され，その内容について資料に基づいて報告がなされた。
- ・ 文献目録委員会からの撤退も視野に入れつつ，継続して検討する。

4. その他

会員情報管理を合理的・確実に進めるために，会員は変更届，退会届を学会HPから届けることとし，事務局長より，その書式について提案された。理事からの書式案への意見を待って，さらに様式を整え，整い次第会員に周知する予定であることが報告され，意見交換がなされた。



唱歌の情景7<松ぼっくり>

作詞：広田 孝夫 作曲：小林 つや江

へ松ぼっくりがあったとき 高いお山にあったとき
ころころころあったとき お猿が拾って食べたとき

4. 役員選出のための理事会記録

日 時：平成 29 年 10 月 21 日（土） 12：10～12：40

場 所：愛知教育大学 第一共通棟 2 階 211 教室

出席者：有本，今田，小川，奥，北山，阪井，佐野，志民，島崎，菅，玉村，坪能，寺田，中嶋，日吉，
本多，村尾，今川（記録）

欠席者：水戸，藤井，山崎

はじめに本会が「会則第 14 条の 7」に基づいて開催されることを確認した。

議題

1. 次期副会長の指名について

有本真紀理事が指名され，承認された。

2. 次期常任理事の選出

以下の各理事を選出した。

寺田 貴雄，本多 佐保美，佐野 靖，島崎 篤子，坪能 由紀子，北山 敦康，菅 道子，小川 容子，藤井 浩基

3. 次期事務局長の選出

今田匡彦理事を選出した。

4. 次期会計監査の委嘱

杉江淑子会員，木村充子会員に委嘱することとした。

5. 地区代表の選出

以下の通り，地区代表を選出した（敬称略，後日のメール連絡も含む）

北海道：寺田 貴雄 東北：今田 匡彦 関東：中嶋 俊夫 北陸：玉村 恭
東海：志民 一成 近畿：村尾 忠廣 中国四国：藤井 浩基 九州：日吉 武

6. 理事会 ML について

副会長候補に指名された有本真紀理事が理事会 ML を作成する。

7. 2018 年度第 1 回理事会の予定

2018 年 4 月 29 日 場所未定

みなさま、聞こえますか、小鳥のさえずりが？
小鳥はなぜ慌ただしくとびまわり、
何を賑やかにさえずっているのでしょうか？
小鳥がくわえているのは年会費納入催促レターです。

学会の企画・運営はみなさまの年会費が原資です。
にもかかわらず未納の方が少なくありません。

督促メールを送ってもアドレス不明による返送メールが多いのです。
メールが届かない場合には、
学会の経費でハガキによる督促をすることになります。

学会の健全な運営に是非ご協力を！

未納の方は早急に納入を！

学会から送った振込票をなくされた方に 朗報！
青色の振込票が郵便局の ATM 周りにあります。
ご自分で口座番号と口座名をお記しの上ご送金下さい。

振込口座：00110-6-79672
口座名：日本音楽教育学会

次年度分は送らないでネ。



唱歌の情景 8 <野菊>

作詞：石森 延男 作曲：下総 皖一

へ遠い山から吹いて来る 小寒い風に揺れながら 気高く清く匂う花 きれいな野菊 うすむらさきよ

「野菊」という名の菊はないそうである。野に咲いている菊というような意味らしい。

野に自生する気高く清く匂う菊を探して歩いた。

白や黄色の田舎菊を見つけたが、「薄紫」は見つけられなかった。

7 事務局より

1) 学会HPに変更届、退会届のボタンを新しく作りました！



事務局長 権藤 敦子

住所やメールアドレス、所属、姓、会員種別等、学会に届けている会員情報に変更が生じた場合には、学会ウェブサイトの右のボタンから速やかにお知らせください。変更手続きをしないと、学会からの送付物やお知らせがお届けできません。学生会員や特別会員から正会員になる場合には、会員としての権利が変更となります。所属等の変更は日本学術会議協力学術団体としての届出の基礎データに影響します。なお、「所属地区」については、会員本人の届けがない限り、住所変更をするだけでは変更されませんのでご注意ください。

2) 年度会費未納の方は至急お支払いください！

年度会費は毎会計年度（4月～翌年3月）のはじめに納入することとなっています（学会細則9条）。未納の方は至急お支払いください。会費未納の場合、送付物の発送、投稿、発表申込等学会活動に支障をきたすこととなります。

平成29年度年会費は7,000円です。お手元に学会から送付した払込票がない場合は、以下のいずれかの方法で、住所・氏名・会員番号を必ず記入、可能なら年会費納入と書き添えて日本音楽教育学会あてご送金ください。

①郵便局備え付けの払込取扱票	②ゆうちょ口座間の送金	③他の金融機関からの振込
(ゆうちょATMだと料金80円) 00110-6-79672 日本音楽教育学会 (ニホンオンガクキョウイクガクカイ)	※本人名義の口座に限ります。 00110-6-79672 日本音楽教育学会 (ニホンオンガクキョウイクガクカイ)	※会員本人名での振込に限ります。 ゆうちょ銀行〇一九(ゼロイチキュー) 店当座 0079672 日本音楽教育学会 (ニホンオンガクキョウイクガクカイ)

3) 学会誌のバックナンバーを特価にて販売しております。

詳しくは学会HPをご覧ください、お早目にお申込みください。

4) 年末年始の閉局期間は、12月28日(木)～1月14日(日)です。この間のご連絡はメールまたはファックスにてお願いします。ただし、事務局員が不在となりますので、お返事は1月15日(月)以降になります。ご了解ください。E-mail: onkyoiku アットマーク remus.dti.ne.jp FAX: 042-381-3562

【編集後記】

本号は、初めてポスター発表が導入された第48回大会の報告をはじめ、夏季ワークショップやAPSMERのルポ、他にも充実した記事が満載のニュースレターとなりました。素敵な誌面にして頂きました執筆者の皆様、ご協力くださった皆様に感謝申し上げます。今後も、国内外の学会・研究会の参加報告や情報、新刊・近刊等紹介など、多数のご投稿をお待ちしております。今年も残すところあとわずかとなりました。皆様、どうぞよいお年をお迎えください。

(高見 仁志)

【日本音楽教育学会事務局】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町5-38-10-206

TEL & FAX：042-381-3562

E-mail：onkyoiku アットマーク remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱26 *郵便物は私書箱へ

郵便振替：00110-6-79672

開局日時：月・水・木 9:00～15:00

事務局員：亀山・若尾・宇田川